

ギブアップは
語らない日



清水らくは

大画面モニターに映し出される二つの棒線グラフでは、常に二体の危険信号が読み取れるようになっていた。一方の青い線は底辺で一定レベルを保っているが、もう一方の赤い線は中ほどから制限値付近までを激しく往復していた。そのことが示すのは、試合が一方的である、ということだった。

観客の熱狂も、どこか予定調和的だった。王者のClemencyは、見事な流線型の体を曲線的に操作し、挑戦者の攻撃をことごとくかわしていた。誰の目にも実力差は明白であり、楽しみはどうやって試合が決まるのかの一点に注がれていた。王者は入力されたとおりに、確実な好機が訪れるまでは勝ちを急がなかった。相手も弱いわけではない。隙を見せれば一気に極めにかかれる技が入力されているのだ。しかしClemencyは落ち着き払っていた。隙を、見せなければいいのだ。

焦っているのか、挑戦者はタックルを繰り返してくる。王者はそれを軽くあしらう。上から潰し、有利な位置を確保する。首を抱え、膝蹴りを数発見舞う。逃れようと身をねじるところを、上手く捕まえ、絶妙な位置取りを獲得する。上から殴り、あわよくば腕を取ろうとする。挑戦者の危険信号の値が、次第に高まる。

Clemencyは、一瞬全ての動きを止めた。観客もつられ、息を飲んだ。そして挑戦者の腕をつかむと、体を反転させ、腕十字に移行した。もがく相手の動きに合わせ、あっさり腕を放すと、次には素早く足を取っていた。がっちりと裏膝十字に捉えられ、挑戦者は動く事すらできない。危険信号が、制限値を越えた。ゴングが鳴り響き、王者の勝利が告げられた。

駆け寄った王者側のセコンドが、Clemencyを抱き上げた。負けた挑戦者側のセコンドは、必死に冷却材をあてがっていた。会場は盛り上がりを見せたが、熱気には程遠かった。多くの人が溜息を漏らした。どこか、冷えていた。人々が求めるのは、期待を裏切らない強さとともに、期待を裏切られる興奮だった。

セコンドの中で、タキシードを着た長身の男がマイクを渡された。短く刈られた金髪、すらっとした頬、歳は中年だが、体付きは非常にがっしりしている。彼、Jimを知らぬ者はこの会場にはいない。かつて格闘技界を熱狂の渦に巻き込んだ、伝説を作り上げたうちの一人である。

「皆様、本日はどうもありがとうございます」

流暢な日本語だった。しかし、誰もそのことに驚きはしない。

「今日もこうしてClemencyは勝つ事ができました。勿論幸運のお陰です。しかし、次のことも事実です。もはや、彼を脅かす者も少ないということも。なので」

毎回恒例のことだった。もはや主催者には対戦相手を指名する権限はない。王者側の要求する相手が、即次期挑戦者候補になる。

「次の挑戦者は、本人の口から言ってもらいます」

JimはClemencyにマイクを渡した。

「次に私が挑戦するのは、柏木だ」

いつもなら歓声なりどよめきなりが起こるところだった。しかしほとんどの観客があっけにと取られていた。もしくは反応の仕方を思いつかなかった。予想できようはずのない名前、しかし誰もが知っている名前が呼ばれたのである。誰かが呟いた。馬鹿げている、と。

「もはやロボットには、敵はいない。人間のチャンピオンに、私は挑戦する」

冷たさが、更に増幅したようだった。そして、誰もが一点を見つめた。一人の青年が、やはり呆気にとられている様子を、皆が目にした。しばらくしてその男、柏木応樹はゆっくりと息を吐き出した。

再びマイクはJimの手に戻った。愉快そうな声で、言った。

「一番強い者を決める戦い、見たくはないですか。私はすごく見たいです」

応樹、誰かが呟いた。応樹、誰かが応えた。応樹、何人かが呟いた。応樹、多くの人が応えた。応樹、応樹、応樹、応樹。応樹コールが湧き上がった。

応樹は戸惑いながらも立ち上がった。彼の名を呼ぶ観衆の熱意が、自然と彼の足を動かした。花道に上がる時には、王者の顔になっていた。そして、総合格闘技The BESTのミドル級チャンピオンが、ロボット格闘技For Futureのリングに足を踏み入れた。

応樹は、まっすぐにJimを見つめた。かつて世界中から応援された男。かつて何度もベルトに挑戦し、そして敗れ、それでも支持され続けた男。そして今、ロボット格闘技界においてもっとも優秀な技術者であった。

ロボットの主体性は、育成者の主体性でもあった。応樹は、本当に戦うべき相手に向かって行ったのだ。

リングアナが、新しいマイクを応樹に渡した。応樹は、初めてちらりとClemencyを見た。そのは、紛れもなく王者のものだと応樹は感じた。

「ちょっと、未だ整理ができないんですが……今日は、個人的に観戦しに来ました。楽しかったです。ただ、まさかこんなことになるとは思いませんでした。僕としては今は何と云っていいか……」

「即答は望みません、Mr.Kashiwagi」

Jimは余裕たっぷりだった。まるで、答えはわかっている、とでも言いたげに。

「ですが、最強は、二人はいらない、人間の格闘家は常々そう言いますがね」

そう言うや、Jimはマイクを投げ、リングを降りた。Clemencyもそれに続いた。

一人残された応樹は、ばつが悪そうに周囲を眺めた。観客も、どうしていいのかわからない様子だった。

「時間を下さい。少し、考えないといけない」

結局、For Future、通称の17回目は、中途半端な空気のまま幕を閉じた。

いつも、森澤ジムの中で一番朝早く訪れるのは応樹だった。毎日、早朝に玄関を掃除する応樹の姿が目撃されている。しかしこの日は違った。朝早くから、様々なマスコミが建物を囲んでいた。

そして、やってきたのは森澤臣至。会長だった。

瞬くようなフラッシュがたかれる。いくつものマイクが向けられる。雑多な質問が浴びせられる。しかし胡麻塩頭の会長は、泰然自若としていた。ただ一言、

「何も決まってないよ」

とだけ言った。

扉をぴしゃりと閉める。そして、電気をつける。

「応樹、えらいことになったな」

「ほんとですよ」

道場の隅から、寝ぼけた声がした。寝袋にくるまった応樹が、眼をこすりながら起き上がった。

「自宅まで来るんですよ。何考えてるんだか」

応樹は髪を掻きむしりながら苦笑した。

「何も考えとらんよ、うちの事など」

二人は箒と塵取りを手にして、ジムの中の掃除を始めた。一度練習が始まれば掃除ロボットの仕事となるのだが、朝一の掃除は儀式のようなものだった。

「で、お前は どう思ってるわけ。やるの、やらないの」

「そうですねえ」

応樹は、箒を動かすのを止めて、斜め上を見上げた。

「正直どうしたらいいものか」

「いいことを教えてやろう」

森澤もまた、手を止めた。

「その昔、チャスの王者とコンピューターが対戦したことがある」

「へえ。その人は無茶をしたもんですね。コンピューターに挑むなんて馬鹿げてる」

「まあ、今じゃ全くそうなんだが、当時はまだ人間の方が強かった。強いと信じられていたと言うべきかな。で、初めて人間の王者が負けて、そのニュースは世界中で話題になった。計算では負けても、複雑な思考を必要とするゲームでは負けたくなかったわけだ」

「そんなもんですか」

「将棋に至ってはそれから三十年を要した。持ち駒を使うからな。やはり人間の名人がコンピューターに負けた時もすごい衝撃だったよ。俺はまだ子供だったが、親父は相当複雑な顔をしていた」

「つまり、格闘技でもその時は来ると言いたいんですね」

「むろんそうだし、そうでない。なぜなら、やろうと思えばロボットが人間に勝つのは簡単な事だからな。制限値設定をはずせばいいんだから。誰が走っても車には勝てない。それだけに特化させれば、機械は人間の能力を簡単に超えるものだ。格闘技でも、最高馬力でぶん殴れば、勝

負にならんよ。しかしロボット格闘技は、最初から人間の規格を前提にしている。制限値設定内で争う純粋なゲームだ。どれだけ人間に近づけるか、それがロボット達の実力になる。そもそも人間に勝つためには存在していないのだから、人間には勝てないと考えられる」

「そうですかねえ。単純に奴等は固くて頑丈そうですけどねえ」

しばらくたっても外は騒がしい。マスコミたちは相変わらずどうにかしてコメントを手に入れようとしていたが、森澤も応樹も相手にしようとはしなかった。次第に他の会員達もやってきたが、まっすぐにジムの中に吸い込まれていった。

森澤ジムは、本来はキックボクシングのジムである。応樹の成功により総合格闘技の環境も整えられたが、最大の目的はキックボクシングの王者を作ることだ。森澤もキックの出身だし、応樹も元キックの王者である。

いつもと変わらぬ練習内容だったが、どこか皆上の空だった。誰かが鉄アレイを転がし、他の者が一斉に振り向いた。

応樹はずっと二階でサンドバックを蹴っていた。鈍く重たい音が響き渡る。雑念が混ざっても、案外その鋭さはそがれないものだった。しかし、正確さは失われていた。ローキックが空振りし、バランスを崩してこけてしまった。

応樹は汗を拭き、首を振り、そして三階の食堂に向かった。森澤ジムは専属のシェフと栄養士を雇っており、それぞれの状況に応じた食事が提供されるようになっていた。

応樹はそこで早い昼食を採った。他には誰もいない。

そう、誰もいなかった。応需を悩ませる事。前には誰いない。迫り来る者も、誰もいない。完全な一人旅は、やる気の維持にも影響を及ぼす。強い敵が欲しい。切実に応樹は願っていた。そしてそれゆえ、Clemencyの気持もわかる気がした。

テレビの中に自分の顔が映っていた。ロボットの顔が映し出される。応樹は凝視した。そこには、二人の格闘家の顔があった。

「やってもいいかなあ」

あまりやる気のない呟きだった。

都市交通は幹線道路を縫うように走っている。多くはモノレール方式の電気稼動車両で、ほぼ自動運転されている。都市内は私有車両進入禁止となっているので、市民は都市交通か地下鉄を使用することになる。下車してから目的地までは、徒歩かタクシーを使うことになるが、今ではすっかり皆歩くことに慣れていた。ロボットの発達により人々の労働時間は短縮され、あくせくと動き回る必要がなくなった。経済発展の沈静化こそが、地下資源が残りわずかとなった中では求められていた。

夕方の車内は、人もまばらだった。応樹に気付いている人もいたが、あまり興味はなさそうだった。服を着ていれば、ただの背の高い若者の一人にしか見えない。

都市交通は異様なほどに静かに走る。車窓からは中央分離帯の木立が見える。車内アナウンスが、次が終点だと告げる。

終着駅の先には広大な都市公園があり、所々に露店が出ている。会社帰りのサラリーマンや、

草サッカーを楽しむ子供たち、おしゃべりにいそしむ主婦。目立たないように緑色に塗られた防犯ロボットが時折循環し、治安を守っている。

応樹はあてもなく公園の中を歩き回った。彼は、子供の頃からこの公園が好きだった。空手に明け暮れた幼少期。野球に浮気した青年期。キックボクシングに出会った学生時代。大学を中退し、それ以降格闘人生まっしぐらだった。何時も変わらず、悩んだ時は此処に来た。通り抜ける風が、淀んだ気持を運び去ってくれるように感じたのである。

いつのまにか、応樹は負ける事を知らなくなっていた。

試合に出始めたころは、それほど目立つ選手ではなかった。器用ではないし、パンチが下手だったのだ。しかし、例外なく対戦相手が長期欠場することになったのである。しばらくして森澤は気が付いた、応樹のキックは異様に力強いのだ、と。応樹と対戦した相手は、打たれた場所だけでなく、ガードした腕をも痛めていたのである。

次第に応樹は、以上に力強いキックを中心に組み立てる選手として活躍していった。ガードの上からでもガンガンと打ちこんでいく。そして、瞬く間にチャンピオンへと駆け上がっていった。

そして、キックボクシングのチャンピオンは、声を掛けられた総合格闘技のイベントに何の気はなしに出てみた。少しだけ寝技の練習もしたが、立っている間に勝負を決める気だった。当日、世間にとっては無名である彼は、観客の反応で初めて自分の立場を知った。小さな団体のキックの世界チャンピオンは、柔道五輪メダリストへの唾ませ犬だったのである。応樹は、花道で震え上がってしまった。ノックの時にグローブをしないようなもの。頭に浮んだのはそんな事だった。殴る、蹴る、肘打ち、膝打ち、様々な勝ちパターンを想像したが、それでも恐怖を拭い去る事はできなかった。何千万人が見守る中一度も負けなかった寝技使いが、打撃でちっちゃな集団のトップを取っただけの人間をねじ伏せに来る。その事実を実感するにつれ、応樹の足はよりいっそう重くなっていった。

セコンドに付いた森澤や総合のコーチも、応樹の様子を見て半ば諦めてしまった。森澤は、二度とこのような陽のあたる場所には出てこまいと誓った。求められていたのは、打撃系のチャンピオンであるという、肩書きに過ぎなかった。誰も応樹に対して期待していない。柔道の英雄が、いかにして子ウサギを仕留めるかが楽しみだったのだ。だから、森澤は応樹に対して言った。

「さっさと決めて来い」さっさと決められて来い、という意味で。一刻も早く、その場を立ち去りたかったのである。

リングに上がると、静寂が訪れた。大舞台に似つかわしくない、世間には無名の男。一部のコアな格闘ファンだけが、応樹の名を叫んだ。応樹は、立ち尽くしていた。観客が息を呑む音が聞こえた。相手のコール。そして大歓声。恐怖が、怒りに変わった。勝利の為に努力して来た日々が、応樹に誇りを思い出させた。勝負である以上勝たねばならない。こんな出来レース、ぶっ潰さなきゃならない。

ゴングが鳴った。胴着を着衣したままの敵が、両手を伸ばしてくる。間合いがわからない。練習してきた事が、全て頭から抜けきっている。だが、奇跡的に、森澤の必死の叫びがそのまま耳に入ってきた。

「相手も打撃は初めてなんだ、しっかりしろ！」

瞬間、肩の力が抜けていった。相手の構えが滑稽に思えてきた。応樹は、格闘家としての顔を完全に取り戻した。

応樹は右足を振り上げた。柔道家もハイキックやローキックの対策を積んで来たのだろう、それなりの防御姿勢が出来ていた。しかし、応樹はそのまま足を前に突き出した。踵が、柔道家の肘と衝突する。それでも世界を制した男は平気な顔をしていた。しかし、勝負はすでに付いていた。肘は、破壊されたのである。

間合いに入ってきた応樹を、当然柔道家は捕まえに来た。しかし応樹は首相撲の態勢から膝蹴りを繰り出した。思わずあとずさる柔道家。そこに狙いすました左ハイキック。とっさに柔道家はガードしたが、今度は右手が悲鳴を上げた。

場内がざわつき始めた。それでもほとんどの者が、台本通りの結末を期待していた。必死で伸ばされる両手。しかし応樹は休まなかった。パンチも出していく。相手がガードをするのを確認してから、懇親の力で打っていった。相手は素人だ。しかし、こちらも素人だ。応樹が出した結論は、先制、そして勝ちにこだわるという事だった。

柔道家は焦っていた。教わった通りにガードしているのに、ガードしたところが痛いなど考えてもみなかった。花道のはずだった。勝てる相手を、とわざわざ断ってからオファーを受けたのだ。約束が違うと思った。

応樹は攻撃をローキックに切り替えた。お膳立てが全て整ってから、セオリー通りの攻めを開始したのだ。柔道家の足が完全に止まった。そして、応樹は的確に間を取り、攻撃の手を休めた。相手はもう出て来られない。誰の目にも、勝敗は明らかだった。そして、タオルが投げ込まれた。

そんな衝撃のデビューから五年。まじめに寝技を勉強した甲斐もあって、応樹はミドル級無敗の王者となった。目指してなったのではない、気付いたら足を踏み入れていたのだ。

あのときから、何が変わったのか。少なくとも公園は、何も変わっていなかった。応樹は、時間の経過を探し求めた。空に、風に、空気に。しかし、変わったのは自分だけだった。歳を取った。有名になった。金持ちになった。そして、鈍感になった。

応樹は、ジムに電話を掛けた。

「俺、やるよ」

はっきりと、そう言った。

三年前まで薄汚く狭い大学の一室を居場所としていた倫理学者は今、東京のど真ん中、ツインキャッスルの南三十五階に研究室を構えていた。家賃月三百万円のその部屋には、研究者だけでなく事務員や会計士、そして弁護士までもいた。他の倫理学者が見れば卒倒するか眉をひそめるかだろうが、貝塚武之の名を聞けば誰もが納得するのだった。

「先生、会見のお時間です」

美しく若く、そして聡明でしゃばらない女性秘書が、貝塚に声を掛けた。貝塚は落ち着き払った様子で小さくうなづく。そして両目からコンタクトを素早くはずし、ゆっくりとふちなしメガネを掛けた。

貝塚とその秘書は、研究室を出てエレベーターに乗った。ツインキャッスル南八階には共同会見場があり、二人はそこに向かっていった。

彼らより先に、もう一人の主演が共同会見上に到着していた。逞しい体躯の中年アメリカ人は、いつも通りにタキシードを纏っていた。今日はロボットを連れていない。

暫くして、貝塚も姿を現した。Jimよりも若いはずだが、老獪さに満ちた顔つきは、年齢を推測することを困難にしている。その目つきは眼鏡の奥に隠され、感情も窺い知れない。

貝塚はJimの横に立った。背は低く、そして猫背だ。体の線も細い。しかしそこにいる誰もが、彼を小さいとは思わなかった。彼の著作が、発言が、そして肩書きが、彼のことを実際よりも大きく見せていた。

記者やカメラマンといったスタッフの反応は、二つに分かれていた。一つは、何かを期待し、じっと会見を待つ人々。そしてもう一つは、嫌悪感たっぷりの目つきで、宿敵を迎えるかのような顔で構えている人々。普段にはない、色のある感情が、会見場の中に渦巻いていた。

「それでは、会見を始めたいと思います。個別の質問の方は後ほどいかがいますので、ご了承ください」

いつも通りの開始合図ではなかった。生身の男性の、生の声だった。それには意味があった。

「貝塚先生、お願いします」

貝塚は会場を見回し、一つ頷き、そして少し口許を緩めた。フラッシュがその端正な顔を照らす。

「皆様、お待たせいたしました。『ロボットの権利を獲得する会』代表、貝塚武之です。本日は私どもから皆様にお伝えしたい事があり、こうしてお集まりいただきました。

ご存知の通り、私たちはロボットにも人間と同等の権利を与えるべきとこれまで主張してきました。全世界百七十万人あまりの会員がおり、現在のロボットの奴隷化に反対する活動していますが、いまだにロボットに対する酷使は止むところを知りません。これまで申してきましたとおり、ロボットは危険信号を判断基準とし行為の選択をしています。これは苦痛を避ける行為といえ、功利主義的には権利を認められるべき存在なのです。現在動物にさえこの権利を認めている私たちにとって、ロボットに認めないというのは暴挙と言うより他ありません。

そこで皆様、今回のこの世紀の一戦を、しっかりと見届けていただきたいのです。無論、Clemency選手と柏木選手の一戦です。Clemencyは自らの誇りに掛けてこの一戦に臨みます。その姿を見てもなおロボットはただの機械だといえるのか、私は皆様に問いたいのです。いわばこ

の一戦は、ロボットの 尊厳を賭けた戦いなのです」

会見はその後も続いたが、応樹はテレビの前から立ち去ってしまった。森澤はその姿を目で追っていたが、何も口には出さなかった。

応樹が三階に上がると、丁度清掃ロボットが働いているところだった。彼らは無言のまま、黙々と作業を続けていた。調理ロボットの方は休憩中だ。彼らは何も不満を言ったりはしない。人間に勝負を挑む事もない。ただ、インプットされた通りに行為するだけだ。

「通過点かなあ」

すでに、能力において清掃や調理はロボットの方が勝っていた。格闘技でも、「魅せる」ことを度外視すれば、人間より強いロボットなど簡単に作ることができる。

「権利とか、関係ないだろ……」

下の階から、ミットを叩く鋭い音が聞こえてくる。応樹はそれが誰のものかを知っていた。応樹は清掃ロボットの肩をぽんぽんと叩き、下の階に下りていった。

「あ、今日は。お邪魔してます」

明るく朗らかな笑顔、澆刺とした声、そして小柄だがしっかりと筋肉の付いた体。

「こんにちは、司ちゃん」

「元気ないですねえ。そなんじゃClemencyの餌食になっちゃいますよ」

応樹は引きつった笑みを浮かべた。

「本当に、びびってるよ。受諾するんじゃない」

「そんなあ。だって応樹さんは格闘技界の王様なんですよ。どっしりとしていてくださいよ」

そうやって司は応樹の胸にチョップを叩き込んだ。シャツの上からだったが、重たく乾いた音が鳴り響いた。

「いってー」

「あ、ごめんなさい」

司のチョップは本物だった。何故なら彼女、長坂司は、舞憐女子プロレスに所属する若手女子レスラーなのである。

「いやいや、たいしたことない」

司は、週に二度ほど森澤ジムに通っていた。舞憐女子プロレスは新興の小規模団体で、練習設備も整っているとはいえない。特に打撃に力を入れたい司にとって、このジムでの練習は非常に重要な時間なのである。

「応樹さんは本当に強いんだから。普通にやれば勝てますよ」

「ありがとう。頑張るよ」

言葉とは裏腹に、応樹の体は強張っていた。これまでにない重圧が、彼本来の気楽さを完全に殺してしまっていた。女の子の声援一つぐらいでは、どうにもならなかった。

テレビの中では、Jimが話し始めていた。世間は、じっと注目していた。

どれ程社会が進んでも、田舎の風景はそれ程変わらない。

三年ぶりの故郷に、応樹は手ぶらでやってきた。

狭い砂利道は、柿の木々を縫っている。

応樹にとってここは、子供の頃の遊び場であり、両親の職場であった。そして今は、少し居づらかった。

視線の先には、木造平屋の大きな建物、柏木家があった。第一次産業従事者が極端に減少する中、ロボットを使用した大規模農業経営においては農作物ごとの独占経営化が進行した。例えば柏木家は県下の柿生産をほぼ独占していた。それでも大金持ちというわけではない。極端な大量生産でしか儲けが得られないほど、農業は採算の悪い職業となっている。

応樹は生家が大きく見えてくるに従い、歩みの速度を緩めていった。そして100mほど手前で、完全に止まってしまった。

かつての住処を、遠い目で見つめた。何も変わっていないことが、応樹の存在を浮き上がらせていた。時折、ロボットの運転する軽トラやトラクターが応樹の脇を通り抜けていく。かつてとは違い、応樹のことを特別な固体とは認識しない。

「ここじゃないな……」

応樹は首を横に振ると、踵を返そうとした。そして振り返った先に、一人の青年の姿を見つけた。

顔のパーツは全て応樹と同じだった。ただ、顔も体も、全てが骨太だった。

「秀(ひで)……」

「兄貴、何しに来たんだ」

柏木秀次は、険しい表情を崩さなかった。応樹は、ため息をついた。

「なんでもないよ。ただ、ちょっと寄っただけだ」

「帰ってくれ」

にべもなかったが、応樹はじっと耐えていた。こみ上げる思いは、自らの意思で鎮めなければならなかった。弟との思い出は、過去の遺物として尊重しなければならなかった。現実には、理解していた。

「いまさら何しに来たんだ。こんなとこ来てる暇あったら、世界中に恥かかないようにトレーニングでもしてろよ」

「わかったよ。そうするさ」

応樹は弟の脇を通り抜けていった。立ち止まる事はなかった。

「いいか、あんたが負ければ人間全体の汚点になるんだ。ただでさえ柏木家の恥さらしなんだ。もし負けたら、二度と柏木の名を名乗らないでくれ」

拳が震えていた。しかし、応樹はその凶器を鞘から抜くわけにはいかなかった。

「そう思ったから、見に来たんだよ。二度と、ここには来ないだろうから」

どんな顔でその背中を見ているのか、応樹は知らないまま立ち去った。故郷の風は、去り行く彼の背中を押し続けた。

Jimは、左手のブレスレットを右手で触りながら、にやにやとしていた。隣にはClemencyがじっと立っていた。向かいには貝塚が座っていた。

森澤会長は、じっとテレビに見入っていた。練習中の者も、ちらちらと伺っていた。

「つまりですね、以前は全ての可能性を網羅するのがやり方だったわけですよ。しかしそれでは、人間の直感に勝てない分野がある。そういうわけで、格闘技術ではロボットは人間に敵わないとされていたんですよ」

「しかし、Jimはそこを乗り越えたわけですね」

「ええ。僕たちは直感で戦うといっても、傾向があるわけです。僕なんかで言えば、間合いを詰められるとローキックが出るんですけど、ムエタイなら前蹴りとか、単純に回って逃げるとか、人によって違うわけですよ。だから、ロボットにも完璧を求めていいところ取りしようとするのがいけないと思ったんです。ロボットの性格を育てていくというか」

「なるほど。確かに、選択肢を減らす事によって、ロボットは驚くほど賢くなりますよね」

「そうなんです。人間は脳みその大部分を休めているわけですが、ロボットは全て働かす事ができます。全ての場所が目的に適応して計算処理できる。これはもはや人間を超えたとも言えますね」

「まさにそうですね。ある意味、ロボットは人間を超えてるんです。なのに奴隷扱いするなんて冗談じゃない」

「まったく、冗談じゃない」

掃除ロボットが傍らを通り過ぎていく。それを見て、森澤は舌打ちした。

森澤ジムは、規模の割にはロボットが少ない。世界王者を抱えるようなところは、高精度のロボットを無駄なぐらいに配置する。かつては美人の受付嬢が果たしていた役割を、ぴかぴかのロボットが果たすようになったのである。しかし森澤は、掃除や調理といった雑務以外にはロボットを用いなかった。受付には若い会員が出て行くし、電話の対応は自分です。今では非常に珍しい事である。

「ロボットが人間を超えるなんてのは、驕りだよ」

森澤は、じっと右手に視線を落としていた。引退をせざるを得なかった、どうしようもないほどの怪我。安全なはずの自動制御機能を有しているロボットの起こした、暴走。当時無名だった森澤の引退を惜しむ者はいなかった。

「人間は今後、ロボットと共存していく道を真剣に考えなきゃならないですよ。でも、今のところ賛同する人は少ない。だからJim、是非今度の試合ではClemencyに勝って欲しいんです」

「任せてください。Clemencyは最高の格闘家だし、私は最高の指導者ですから」

テレビの中では二人の男が笑い、テレビの前では一人の男が怒っていた。

「応樹、絶対勝てよ」

突然、掃除ロボットが立ち止まった。森澤は忌々しげにコードを引き出し、コンセントにぶち込んだ。

「ロボットなんかには負けるんじゃないぞ」

ファミレスで、応樹はコーヒーを飲んでいた。

深夜だが、そこそこ人が多い。応樹だと気づき、指差す者もいた。

何故ここに来たのか、応樹にもわからなかった。普段も滅多に来る事がない。

音の出ないテレビが、海の中の映像を垂れ流している。ぼーっとそれを見る。魚の群れ。イソギンチャク。水泡。水泡。水泡。

何時からかわからない、戦いの歴史が頭の中で渦巻いていた。強敵との試合、かませ犬との試合、厳しかったスパarring.....

それらを手に入れるために、応樹は故郷を捨てたのだ。なのに、何故こんなに苦しいのか？応樹は、心のうちで頭を抱え、もだえ苦しんでいた。

「あの一」

暫く気付かなかったが、顔を上げると、一人の女性が応樹のことを覗き込んでいた。

「柏木応樹さんですよ」

にこやかな笑顔だった。しかし、よくあることだった。

「そうですけど」

「いつも見えます！頑張ってくださいね」

応樹も、少しだけ笑った。

「ロボットなんか、負けないで下さい！」

笑顔は崩さなかった。しかし、なかなか言葉が出てこなかった。

「ええ、Clemencyには絶対負けません」

ようやく振り絞った言葉だった。女性は満足したのか、手を振りながら去っていった。

「Clemencyだろ、俺の相手、Clemency.....」

呪うような声だった。応樹は、頭を抱えた。

森澤も頭を抱えた。

応樹の動きにまるで精彩が無い。切れがない、力がない、スピードがない。

上の空だった。ただ、数をこなすだけの練習になっていた。

「応樹、おい、応樹！」

「.....え？あ、はい」

「今日は休むか？」

「あ、いや.....」

「休むんですか、応樹さん」

「あ、司ちゃん」

練習場に現れたのは、大きな旅行バックを抱えた司だった。

「もうなんか、こいつおかしくなっちゃってね。まるで別人なんだ」

「そんな感じですねえ」

応樹はまるで来客に気付かない様子で、サンドバッグを力なく蹴り続けていた。

「応樹さん、応樹さん！」

「え、あ……司ちゃん」

応樹は司へと視線をおろしたが、その目は完全に死んでいた。それは、司にとっては初めて見る、情けない姿の応樹だった。

「あのお……頬、いいですか？」

「え？」

ジム内に、激しい掌打の音が鳴り響いた。打撃の専門家たちさえ、聞いた事のないほどの大きさだった。

「私は、こうやって先輩に気合入れられたんです」

得意げに言う司だったが、しかし視界から応樹の姿は消えていた。足元で、頬を押さえてうずくまっていたのだった。

「やっば、プロレスラーは平手打ちのプロなんだなあ」

森澤の感心を横に、応樹はいつまでも立ち上がらなかった。頬を押さえたまま、ぶつぶつと呟いていた。

「あれ、効かなかったですか？おかしいなあ」

「俺、どうしたらいいだろ……」

応樹は震えていた。司は、腕を組んでその姿を見つめていた。

「俺、わかんねえよ……誰と勝負するんだよ……」

「あまったれんじゃねえよ、このくそがきが！」

二度目の平手打ちが、見事に炸裂した。ジム中の視線が、司に、そして応樹に注がれた。

「って、これもよく先輩にやられます」

もはや、司の目は少しも笑っていなかった。いつもの明るい様子は影を潜め、応樹に向かって鋭さを叩きつけていた。そして、応樹が立たなければ、すぐにでも次の平手、それだけでなく、拳や蹴りまで用意していた。

応樹は立ち上がった。泣きそうな目をしていたが、それでも司と向き合った。

「司ちゃん、俺……」

「応樹さんは、Clemencyと勝負するんでしょ。Clemencyが怖いんですか？」

「それは……」

「Clemencyとの勝負を受けたんなら、他の事はもういいじゃないですか。ねえ」

応樹は黙ったままだ。しかし、もう、弱音を吐くことはなかった。

司はバッグから、封筒を取り出し、応樹に差し出した。

「今度、初めてメインなんです。よかったら、見に来てください」

「……ありがとう」

応樹は唇を噛み、天を仰ぎ、そして大きく頷いた。

「絶対見に行く」

格闘ロボットも練習をする。

ロボットにとって重要なのは、データの蓄積と判断力の上昇だ。いくらパターンを多く備えていても、出しどころを間違えては意味がない。弱いロボットは、同じ過ちを繰り返す。重要なのは、何が引き金となってその過ちが行われるのか、しっかりと見極めてやることである。

「いいぞ、Clemency、そこは我慢だ」

JS Club、通称ジムジムでは、Clemencyと人間のスパーリングが数多くこなされていた。普通はロボットの相手などしない大物も、さまざまな理由から Clemencyと肌を合わせることを了承した。興味本位の者もいたし、応樹に対する嫉妬からの者もいた。彼ら一流の格闘家たちは、Clemencyに対して本気でかかっていくのだが、やはりどこかロボットに対する侮りがあった。最初はJimに対する礼儀からおとなしくClemencyを「鍛えてやる」のだが、いずれは仕留められるという自信があった。しかし一分もすると、自信は失われ、焦りばかりが噴出してくる。Clemencyは相手の心のうちを読むかのように、自分はただじっと息を潜めている。一流の人間を相手に、じっとしていられることがすでに見事なのだ。

寝技で下になっても、Clemencyは確実に防御を続ける。他のロボットならば、数あるパターンの中から脱出の術を何か試すところだろう。しかしClemencyはまず、負けないことに専念する。これまで何体の敵が体力を無駄に消耗させられたことだろうか。Clemencyは相手が攻め疲れたところで、一気に牙をむく。入力されている中から最適な方法を探り、実行可能と判断されたなら即行動に移る。相手が人間でも戦術は変わらない。

スパーリングとはいえ、一流の選手たちがロボットにタップする光景は見る者を戦慄させた。中には協力を約束しておきながら、いつの間にかいなくなっている者もいた。

「Jim、私の調子はどうですか」

それは、Clemencyの口癖だった。相手に勝つ度に、ClemencyはJimに向かって確認をする。「絶好調だよ。何も心配はない」

そしてJimにそう言われると、表情のない頭で大きく頷く。これも入力された動作なのだが、すでにClemency固有の儀式のようになっていた。

「もうすぐ……もうすぐ、世界が獲れる」

Jimは、勝利を確信して微笑んだ。Clemencyも、再び大きく頷いた。

一方その頃、森澤ジムの前には軽トラックが一台やって来ていた。荷台には直方体の大きな段ボール箱が積まれている。

運転席から下りてきた森澤は、何人かに手伝わせて荷物をジムの中に運び入れた。すでに一階のリング前には応樹を始めジムのメンバーたちとマスコミが何人が待ち構えていた。

「出来立てほやほや、特注品だ」

ダンボールから出てきたのは、ぴかぴかのロボットだった。しかし一切動くことはない。データ入力がされていない、空のロボットなのである。

いっせいにフラッシュがたかれたが、応樹たちは意に介さず、さっさと自分たちの作業を進

めた。ロボットをリングに上げる間、応樹は肘や脛に硬めのプロテクターを装着していった。ロボットと対戦するに当たり、協議の結果ルールで決められたものである。そして最後に、オーブンフィンガーグローブに手を通し、自らもリングに上がった。

森澤がロボットの姿勢を整え、応樹もその前で背筋を伸ばした。森澤がロボットの頭を押さえつけ、応樹も頭を下げる。

「どうだ、対峙してみた感想は」

「正直、ただのロボットです」

「だろうな」

Clemencyに似せては作ってあるものの、中身のないロボットに威圧されることはなかった。応樹は前に進み出ると、ロボットと握手を試みた。

「硬いですね。あ、こっちにもグローブ付けてください」

素手のロボットに殴られる姿を想像して、応樹は苦笑した。鎧兜で戦えばどうか、などどうでもいい想像を巡らしてみた。

その後森澤と応樹は、ロボットを使いさまざまなシュミレーションをこなした。パンチやキックの間合いを確かめ、上に乗られたときの重さを実感した。そして力を込めて殴ってみた。

「体も固いですね」

「どうする、打撃じゃ無理か」

「だったら俺の出番じゃないでしょう」

応樹は、何度かハイキックを試した。彼のもっとも強烈な武器であるそれは、ロボットの頭上を何度も越えていった。

「おいおい、これはClemencyと同じ身長に作ってあるんだぞ」

「いいんです。ハイキックで仕留めるとは限りませんし」

練習は、淡々と続けられた。次の仕事もあるマスコミたちは、日が落ちる頃には誰もいなくなっていた。

「さて、これからが本番、か」

深い息を吐き、応樹はロボットの顔を見つめた。何度見ても、敵対心の沸かない、のっぺりとした顔だった。

次の日のスポーツ新聞の一面には、こんな記事が踊った。

応樹豪語！「Clemencyも、正直ただのロボット」

自信の表れ！「別にハイキックじゃなくても倒せる」

「Jimは相当怒っているだろうなあ」

記事に目を通すと、感慨深げに森澤は呟いた。一方の応樹は、そわそわとしており、時折玄関のほうを眺めていた。

「気になるのか」

「えっ」

「あれ以来こないもんなあ、司ちゃん」

「……別に気にしてませんよ」

司は毎週水曜日は欠かさず練習に来ていた。今日がその水曜日なのだが、あと三時間で木曜日になる。

「別に怒ってはないと思うけどなあ。あれは司ちゃんなりの応援だったんじゃないかな」

「だから気にしてないですってば」

応樹はそれきり黙りこくってしまった。手と足は動いているが、やはり目だけはちらちらと玄関を見ていた。

そして、結局、司が現れることはなかった。

新潟ドームを借り切って行われたロボ権のイベントは、いつにない盛り上がりを見せていた。メディアに露出することにより認知度が上がり、一般からの参加が大幅に増え、またマスコミも数多く集まったのである。

会場内にはロボットはいるものの、自由に動き回り労働に従事することがない。入り口の看板にはこう書かれている。「どなたもご参加自由！もちろんロボットも！」

会場の様子を見回し、貝塚は非常に満足そうな笑顔をしていた。昨日は不快なスポーツ新聞の記事に激怒したものの、今ではすっかり落ち着きを取り戻している。

そして、人々が最も多く集まっている場所に、貝塚は向かっていた。そこにはリングが設置されており、予告はしていないものの、誰もがゲストの存在を信じて疑わなかった。

そして、開場に突然大音量の曲が流れ始めた。リング前の熱気は増していく。Clemencyの入場曲だ。

そして、いつものようにClemencyは登場した。派手な演出は何もない。幕をくぐったロボットは、一度だけ右腕を高く掲げた以外は、ただ淡々と歩くのみだった。

会員たちは崇拜するように、尊敬するように、懇願するようにその姿を見つめていた。それ以外の人たちは、ある者は敵視し、また別の者は興味本位だけで眺めていた。

舞台入場したClemencyは、四方に礼をすると、マイクを要求した。その動きがあまりにJimそっくりだったので、コアな格闘技ファンから笑いが漏れた。

「今日は、格闘家のClemencyです」

滑らかな音声が響き渡った。ロボットたちを見慣れた人々にとっても、今この瞬間のClemencyの立ち振る舞いは驚嘆に値するものだった。入力されたとおりに動くのではなく、自らの選択で動き、話し、時には首を傾げて見せる。それを見たほかのロボットたちが、慌てて人間らしく振舞おうとして逆にギクシャクしてしまうほど、Clemencyはその存在感を周囲に撒き散らしていた。

「今日は私たちロボットの権利を守ってくださる皆様のため、是非挨拶をと思い一人でやってきました」

会場がざわめきに包まれた。内心人々はJimがいつ出てくるのかと訝しがっていたのである。いくらロボ権主催イベントとはいえ、ロボットが一人で新潟までやってくるなど前代未聞だった。

「ご存知のとおり、私は今度人間の王者、柏木応樹と試合をします。かつてない強敵との勝負にわくわくしています。ですが、使命を帯びて緊張していることも確かです。私たちロボットは、まだ市民権を得ていません。人間に劣ると思われているのです。私たちは誓って言いますが、人間を憎んでいるわけではありません。ただ、友人になりたいのです。どうか、今度の試合、私の戦いぶりを見ていてください。ロボットも感動を与えられることを、お約束します」

完璧だった。あまりの完璧さに、誰もが一瞬、Clemencyがロボットであることを忘れ、そしてロボットだから完璧にこなすのだ、と思い直すのだった。

「そして、今日は皆様に、見てもらいたいものがあります」

Clemencyがそう言うと、リング上にマネキンが運び込まれてきた。顔は描かれていないが、その体型の鋭利さは明らかに応樹を意識して作られたものだとわかった。マネキンはClemencyの前

に立たされた。

「まあ、見ていてください」

マイクを手放したClemencyは、左足を大きく振り上げた。空気を裂き分ける冷たい音が、波打っていく。そのままハイキックは右側頭部に直撃し、マネキン人形は吹っ飛ばされ、リングの下に落ちた。

歓声も起きなかった。驚愕に満ちていた。ただ一人、貝塚だけが小さく、頬を緩めていた。

「ハイキックじゃなくても、倒せますけどね」

地声でそう言うと、Clemencyはリングを後にした。観衆は理解していた。Clemencyは、怒っている。

舞憐女子プロレス。大手団体の相次ぐ崩壊後、関西を拠点として作られた。所属レスラーは少ないが、人気ベテラン選手の運営にまで渡る頑張りで、何とか経営を維持している。

とはいっても、やはり地方巡業は苦しかった。プロモーター不在の中、招待券を配ってもなかなか席は埋まらない。

がらがらの席の中で、応樹はじっと試合が始まるのを待っていた。パイプ椅子の座り心地は非常に悪い。小さな子供が走り回っている。自分がデビューした頃のキックボクシングの会場に似ており、応樹は微笑んだ。

新しい団体に古ぼけたリング。忙しく動いているスタッフは、皆レスラーや練習生。お膳立てされたのではない、必死に作られた舞台。

応樹の胸の中で、もやもやとした何かがうごめいていた。気持ちが高ぶってきた。田舎のすかすかの会場の中で、ただひとり、らんらんと輝く目で空のリングを見つめていた。

そして、若手同士の試合から興行は幕を開けた。試合内容はお粗末なものだった。以前ならばデビューをさせてもらえないレベルの選手たちだった。それでも、応樹は目を逸らさなかった。そこには、闘いがあると思った。かつて、応樹もそこにいたように、必死に相手に食らいついていく選手たちがいた。

試合は進んでいく。見慣れた客には物足りなかったし、義理の客には面白くなかった。それでも、応樹にはこみ上げてくるものがあつた。誰も、手を抜いていない。誰も、慢心していない。全力。

そして、残すはメインのみ。暫くの静寂。

最初に、司が入場して来た。かざりっけのない、青一色のコスチューム。見るからの新人。それでも、堂々と前を見据えていた。

次々と選手が入ってくるが、司以外の五人はメインイベンターとしての風格を持っていた。名前を知る選手が出てきたので、客席もそれなりの盛り上がりを見せる。

リングアナによるコール。「長坂司」には拍手もまばらだった。それでも必死に客席にアピールする司。応樹は、熱い視線を送り続けた。

ゴングが鳴った。司は先発だった。二周りは大きい相手を前に、頬を叩き、気合を入れてから突っ込んでいく。手四つになるが、簡単にロープまで押し込まれてしまう。体力も、技術も、キャリアも、何もかもが違う。ロープブレイクを命じられた相手は、離れ際に司に平手を叩き込んだ。乾いた音と共に、応樹の頬にも乾いた感触が蘇った。

司は、攻められる一方だった。避けようとしなかった。殺気さえ感じさせる目で、大先輩たちを睨み続けていた。いつの間にか、観客の目も司に釘付けになっていた。やられてもやられても、立ち上がっていく。誰かが言った「立て、司！」そして誰が言った「やり返せ、司！」

そして、司は渾身の力で反撃した。まずは平手で張り返した。そしてエルボーを打ち込んだ。しかし、全然効いた様子はなかった。それでもエルボーを打ち続けた。そして、打ち返されたエルボーでダウンした。

それでも、また立ち上がった。何度でも、立ち上がった。

関節を極められると、うめきながらロープに手を伸ばした。場外に落とされ、鉄柱にぶつけ

られ、それでも倒れなかった。二人係りの攻撃に、歯を食いしばって耐えた。

何とか交代し、司の試練は終わった。だが、応樹とてプロレスの掟は知っている。司は、もう一度リングに立たなくてはならない。それが、新人の役目なのだ。

試合が始まって二十分が経過。再び交代を受けた司は、初めての大会技を繰り出した。コーナーからのドロップキック。そして、それは最後の技となった。高々と抱え上げられ、そして投げ落とされた。カウントが三つはいる。司は、役目を果たした。

帰り支度を始める人々。だが、応樹はじっと、動かなかった。司から、目を逸らさなかった。頬が、さらにひりひりと痛んでいた。

試合の三日前、応樹は血を吐き出した。

他に、吐き出すものがなくなっていたのだ。

「応樹っ」

リング脇でうずくまる応樹の下に駆け寄った森澤は、大きく眉をしかめた。応樹が、笑っていたのである。

「おい、どうしたんだ」

応樹は、血の付いた右手を森澤の方へと差し出した。

「悔しいでしょう、Clemencyは。あいつには、この苦しみが無い」

森澤は、言葉を失い、ただただ赤いものを見つめていた。応樹は、かまわず笑い続けていた。

試合当日。この日の興行は、ロボット格闘技For Futureにとって、苦しい出だしとなった。会場は超満員。しかし、全く盛り上がらない。誰もが、ロボット同士の対決を漫然と眺めていた。

テレビ中継も、メインまでどうつなぐかという課題に四苦八苦することになった。試合と試合の間は常にメインの煽りで埋めていた。「人類対ロボット、最初の戦争。」大会のコピーが繰り返し絶叫となっていた。

応樹は、控え室でいつも以上に静かにしていた。極力体も動かさない。セコンドも黙っていた。

時間は淡々と過ぎていく。いつも以上に、ロボットたちは無機質に試合をこなしていた。彼らをメンテナンスする人間のほうに、気合が入らなかったためである。

ついに、セミファイナルが始まった。応樹は専用のプロテクターを装着し、シャドーを繰り返していた。いつもより、目が細くなっていた。そして、試合はすぐに終わったようで、会場全体が息を呑む音で揺れていた。

応樹は唇を噛み、汗を拭った。森澤に目を向け、笑いかけた。

「楽しめそうです」

一向は、長い道のりをそれぞれの思いで歩いていった。会場への門をくぐったとき、聞こえたのは歓声や怒声と呼べるものではなかった。音だった。何かが鳴り響いていた。応樹はそれを震えだと思った。怖いからなのか、心地よいからなのか。応樹は知るつもりもなかったが、確かに人々は、人々の心は震えていた。

既に、Clemencyはリングの上にいる。ロープにもたれかかり、会場をゆっくりと見渡していた。セコンドにはいつものようにJimが控えていたし、最前席には貝塚の姿もあった。応樹には彼らの様子をしっかりと捉えることができ、そして感情を動かされることがなかった。初めて柔道家と戦ったときと同じように、ただ、敵がいるとさえ思えばよかった。応樹は、鏡を見るときのように、水を飲むときのように、自然と花道を歩いていった。観客は応樹の様子を見て、心の内に大きな安堵を抱いた。詳しく言い表すことは困難だったが、応樹とClemencyは別の種類のものだと、確信させられたのである。

空間は独立していた。ロープをくぐり、リングに立った瞬間から、世界は応樹とClemencyだけのものになっていた。他のものは全て舞台装置で、これまでのことは全て他愛ない書物の一節に過ぎなかった。応樹はClemencyを上から下まで嘗め回すように見た。無機物でできたロボットの中にも、筋肉が、神経が、そして心臓が見て取れた。そして、Clemencyの瞳こそが、最も注意を惹かれる対象だった。かつてffのリングで対峙したときよりも、強烈で、澄み渡っていた。応樹は、強く拳を握り締めた。

準備が全て整い、震えは震撼になった。二人の格闘家はどちらからともなく歩み寄り、右の拳をあわせた。ゴングの重く乾いた音が、会場の外側へ、そしてリングの内側へと鳴り響いた。

試合が開始して、一番最初に目を丸くしたのはJimだった。セコンド陣やファンも次第に驚きを

共有していった。

Clemencyが、全くJimに似ていなかったのである。構え、佇まい、雰囲気。全てを入力したはずである親の手を離れ、Clemencyは自分らしい格好で応樹の前に立っているのである。貝塚はその様子を微笑みながら眺めていたが、Jimは心の内のざわめきを無視することができなかった。まるで突然自分の手足が勝手に動き出したかのような恐怖。臓器が自己主張を始めたかのような戦慄。どれほど洗練されようとも、格闘家としての枠組みは不可侵だと信じていたのに。

だが、Jim以外の観衆はすぐにClemencyの格好など気にしなくなっていた。むしろ、多くの者は心のどこかでそれを予想していたぐらいだった。Clemencyは既に、規定されたロボットとしての枠をはみ出し始めている。しかし、ロボットとして生まれた以上、ロボット以外の何物でもない。名目と内実の乖離を、人々はそのまま受け止め始めていた。問題は今戦っているどちらが強いかであり、人間がどこまで強いかということだった。

応樹も、純粹にClemencyの姿勢を見つめることができていた。自分との対戦に向けて、練習し、考え、そして強くなっただろうと思った。応樹は頬の痛みを思い出していた。自分も強くなっただけであると暗示をかけた。

応樹が打撃を狙っているのに対し、Clemencyはタックルの機会を狙っていた。お互いに間合いに気をつけ、なかなか触れ合うことすらできなかった。それでも消極的だとか、面白くないとか、誰もそうは思わなかった。一瞬で、全てが決まってしまうかもしれないのだ。人類が、ロボットに敗北する瞬間が来てしまうかもしれないのだ。結果が全てだった。

最初に仕掛けたのは応樹のほうだった。左のローキックを出す。Clemencyは膝を立てガードした。唾を飲む音で地鳴りがした。

いつもとは違う感触に、少しだけ応樹は戸惑った。顔色がないため、どれだけ効いているのかは想像するしかない。痛みを感じない以上、強さが全てだった。設計者が唸るだけの衝撃を与えなければならなかった。そして、それはまだ誰も、どのロボットも成し遂げていないことだった。

Clemencyは次第に圧力をかけ、応樹を狭い方へと押しやっていった。そして最初のタックルが、応樹の腰を襲った。応樹は強く足を踏ん張り、コーナーを背にして耐えた。倒されることはなかったが、跳ね返すこともできなかった。二十秒ほどがそのまますぎ、そして、レフェリーがブレイクをかけた。

再び対峙したとき、応樹はにやりと笑った。Clemencyはその不自然さに一瞬動きを止め、ガードを固くした。そして、次の応樹の攻撃が繰り出された瞬間、会場から音が消え去ってしまった。Clemencyはよろめき、そして応樹は同じ攻撃を繰り出し続けた。

Clemencyは股間を何度も蹴り上げられ、危険信号を少なからず上昇させた。テレビの解説席では、慌ててルールの確認がされていた。急所攻撃は反則となっているが、Clemencyの、ロボットの急所に関しては明文化されていなかった。そして実際、ロボットの股間は急所ではなかった。

「盲点ですね。人間にとって急所であるため、Jimも股間への攻撃の対処は入力しなかったんですね」

解説席に座ったffの主催者は、実に楽しそうだった。

しかし応樹は、ぱったりと攻撃をやめてしまった。

「あとは、逃げ切れれば俺の勝ちだぜ」

唇の端をあげ、応樹は手招きをした。

「もう、対応できただろ。お前はそういう奴だ」

そして、観衆は確かに見た。Clemencyが、笑ったのである。

「いい顔してるよ」

応樹は、顔を引き締まらせた。

もはや、Clemencyの顔は自由自在だった。実際にはどの部分も動いてはいない。それでも、怒り、喜び、憂い、そして焦り。全てがその眼、耳、口からにじみ出していた。そのことに一番驚いているのはJimであり、一番はしゃいでいるのが貝塚だった。

応樹とClemencyは、向かい合ったままあまり動かなくなった。試合開始から五分が過ぎていた。10分2ラウンド制、既に四分の一が過ぎていく。格闘家、芸能人、ロボット解放主義者、多くの人々が、完全に試合にのめりこんでいた。そして人々の罪のない好奇心は、予想外の何か

を期待してやまなかった。このまま応樹が逃げ切ってしまうのは、平凡すぎる。

そして、ロボットの魂は人々を裏切らなかった。6分30秒、Clemencyの左足が、大きく振り上げられた。右手を上げてガードした応樹だったが、キックの重たさと、そしてプロテクター越しの衝撃という違和感が、そのバランスを崩させた。

「よしっ」

それはClemencyの声だった。今まで誰も見たことのない、誰もしたことのない、ハイキックからの素早いタックルが繰り出された。応樹はマットに倒され、Clemencyはその上からかぶさった。場内が、どよめきと歓声に包まれた。攻防が、生まれたのである。

グラウンドテクニクではClemencyに分があるとされていた。入力したJim自身が関節技の得意な選手だったし、Clemencyの規格はグラウンドに適しているとされていた。だが、実際には応樹はこれまで負けたことがない。グラウンドでの防御は一流であるとされているのである。

応樹は足をClemencyの胴に巻きつけ、ガードの体勢を維持していた。Clemencyも無理には動かさず、顔や腹にこつこつと拳を落としていった。

「応樹、慌てるな」

森澤の声に、応樹は顎だけ動かして応えた。そして、下から手を出していった。動きのある膠着状態のまま、二分が過ぎた時だった。応樹が下から出した右手を、Clemencyは掴みとった。振りほどこうとする応樹。しかしClemencyは執拗にその手を握り続けた。応樹は、次第に気がついていった。Clemencyの手に触れられることにより、自らの手が次第にむずがゆくなっているのだ。普段試合中には絶対に触れることのない金属や樹脂の感触が、奥底からの嫌悪感を呼び起こしている。応樹は、少なからず戦慄した。Clemencyは、自らがロボットであることを武器にし始めていたのである。

二度目のゴングが鳴った。1ラウンド終了の合図である。二人の格闘家は、しっかりと足取りで自陣のコーナーに戻っていった。

「応樹、どうだ」

「手強いですよ」

インターバルの間、応樹はずっと目を閉じていた。森澤の問いかけにも、顔を動かさずに答えていた。頭の中では、Clemencyの動きが回想されていた。ぞっとする右手の感触を、心の中で消化しようと努力した。そして、短い休息は過ぎていった。

「決めてきます」

応樹は、右手を振りながらリングの中央へと赴いていった。

再び対峙したClemencyからは、温度が伝わってこなくなっていた。ロボットがどれほど疲労するものか、応樹には知ることができない。一方の応樹は、額から、肩から、汗を垂れ流している。

「気持ちいいんだぜ」

そう言って、応樹は汗を拭った。第2ラウンドの、ゴングが鳴った。

様子を見ることなく、応樹は小刻みにローキックを放っていった。こつん、かつん、と乾いた音が鳴り響く。効いているのか、誰の目にもわからない。蹴っている応樹のほうが、むしろ痛いのではないかと思われるほどだった。それでも応樹は腿の裏を蹴り続けた。これまでの、人間同士の試合なら決め手になる攻撃だった。キックボクシング時代にはこれだけで相手を倒してきたし、総合格闘技の舞台でも一級品の武器として機能してきた。だが、ロボットではどうなのか、それは謎だった。この戦いは、初めてのケースなのだ。

Clemencyの危険信号は平行線を辿るばかりである。Clemencyの体は危険を感じていないのである。それでも応樹は蹴り続けた。どこからか掛け声がかかった。応樹は更に蹴った。掛け声の合唱が起こった。会場が一体となって、応樹のリズムを作り上げていた。受け止めるClemencyさえも、リズムを作り出す機関の一部となってしまった。

Jimが叫び声をあげるが、少なくとも応樹の耳までは届かなかった。応樹は流れに身を委ね、ローキックを放ち続けた。効いているかどうかに関係なく、応樹の心は昂ぶってきた。Clemencyが、二歩後ろに引いた。そして、応樹の左足が、突然軌道を変えた。ローに集中させておいてのハイキック、まさに布石どおりである、しかし……

「No!!」

Jimの甲高い悲鳴が、会場を引き裂いた。何が起こったのか、そもそも何かが起こったのか、すぐには誰もわからなかった。大きく振り上げられた応樹の足は、Clemencyの頭上を越えていった。Clemencyはしっかりと立っている。それなのに、一人、Jimが頭を抱えている。

応樹は、横目でJimの悶える姿を見て、酸素の足りない頭を高速で回転させた。そして、一つの仮説を作り上げた。馬鹿馬鹿しいが、確信の持てる仮説を。

応樹は、再び同じ軌道でハイキックを放った。Clemencyが動くまでもなく、やはり応樹の足は頭上を越えていく。応樹はしかし、力強く左足を着地させた。そしてClemencyの眼を睨み付けた。

「あっ」

森澤が、声を漏らした。

「見たことある」

観客の誰かが、言葉にした。

「くたばれ、Jim!!」

応樹は叫び、左の拳を振り上げた。Clemencyは、全く動かない。ガードの間をすり抜け、応樹の拳はClemencyの頭部に直撃した。Clemencyは、何の抵抗もなく、マットに倒れていった。

レフェリーがダウンを申告する。しかし、危険信号には何の反応もなかった。そして、Clemency自身も、ただただ倒れていると言った様子で、言うなれば呆然としている状態だった。ただ一人、Jimだけがいつまでも取り乱していた。

5カウントで、Clemencyは立ち上がった。歩き始めたばかりの赤ん坊のように、ふらふらとしていた。だが、応樹は何も仕掛けなかった。ただ、こう言った。

「今のは、Jimのせいだ。気にするな」

Clemencyにはその言葉の意味がわからなかったが、格闘技に詳しい者達は思い出し始めていた。かつてJim Simonsがベルトに挑戦し、完膚なきまでに叩きつぶされた試合があった。そのときの敗因こそが、王者の放った鋭いハイキックだったのである。その試合が、そのハイキックがトラウマとなり、Jimは現役を退くことになった、と言われてきた。

「Jimは、こわくて入力できなかつたんだろうな、同じようなハイキックを」

「柏木、いい気になるな」

低く重たい声が、Clemencyの口から吐き出された。人々は聞き耳を立てるため、精一杯沈黙した。

「対策は、今自分で入力した」

「そうこなくっちゃ」

言うなり、応樹は更にハイキックを繰り出した。Clemencyは体勢を低くし、一步前に踏み出した。応樹も足を引き寄せるなりガードを固めた。Clemencyのタックルは、押しつぶされた。応樹はその身を引き離し、Clemencyが立ち上がるのを待った。

そのあと、二人には何の好機も訪れなかった。応樹の打撃も、Clemencyのタックルも、相手に見切られてしまった。それでも会場は盛り上がっていた。試合が終わったとき、二人の格闘家に向けられたのは、大観衆の温かい拍手だった。

判定の結果は、3-0で柏木応樹。どちらからともなく歩み寄り、二人は握手を交わした。

Jimは控え室に運ばれ、貝塚の姿は消えていた。そしてClemencyは、それらの人々を探そうともせず、応樹から目を逸らさなかった。

「また、頼む」

「ああ。いつでも」

二人は、再び握手を交わした。

「ヒーローですね」

午前三時。延々と続く祝勝会を抜け出した二人は、明るさの絶えない新宿の街を並んで歩いていた。

「燃え尽きたよ」

応樹は右手をひらひらと振って見せた。そしてその手を見て、司は目を丸くした。

「応樹さん、それ……」

「ロボットとやるのは酷だよ。次は、ないことを願うね」

応樹の右手の甲は、どす黒くにじんでいた。そして、手のひらはずっと中途半端に開いたまま固まっていた。

「早く治療しないと！」

「もう見てもらったよ。ただ、初めてのことだから原因不明、治療方法も不明だって言われた」

応樹はうつむきながら、唇の端を吊り上げた。そして、右手をポケットに突っ込む。

「どっちにしろ、しばらく休むかな」

司は応樹の前に立ち、彼の右の頬をつねった。

「格闘家は、常に臨戦態勢でいてくださいよ」

二人は、控えめに笑い続けた。そして、今度は応樹が司の前に立つと、深々と頭を下げた。

「ありがとう」

「ちょっ、ちょっと、待ってくださいよ」

「色々教えてもらったよ。おかげで、勝てたのかも」

「えーと、じゃあ、そういうことで」

こうして、応樹の長い一日は終わった。

いつものように、朝から応樹はジムに来ていた。だが、いつものようにテーブルの上に置かれているはずのスポーツ新聞が見当たらなかった。

最上階まで上がると、練習生の一人がマシンに隠れるようにして新聞を読んでいるのが見えた。

「おっはよ」

「わ、お、おはようございます」

「珍しいじゃん、こんなに早くから」

「いや、昨日つぶれちゃいまして、家に帰れなかったんす」

「そういや、お前んち遠かったっけ」

応樹は、身をかがめて記事を覗き込んだ。

「あ、だめっす！」

練習生は応樹に新聞を見せまいとして体をひねったが、応樹はひょいと新聞を取り上げた。

「今日は俺一色かなー……う……」

応樹は声を失い、体を硬直させた。その記事から、視線を全く動かさなくなってしまった。

〈Clemency、即日解体〉

右手だけが、小刻みに震えていた。

昨日、Clemencyの敗戦を受け、Jimは次のように発表した。

「Clemencyは最強の名を目指すために製造され、そして育成されてきました。私が教えることはもうないし、私が教えたからこそ負けました。もう、彼の存在意義は失われました。このことは、試合前から決めていたことです」

応樹たちが祝勝会をしている間に、既にことは実行されていた。データを抜かれたClemencyは、磁力処理によって脳を破壊されていた。今日の午後には体も破壊される予定だった。

「馬鹿な」

やっと声を絞り出し、テレビへと走った。いくつかチャンネルを回すと、貝塚の顔が出現した

。「まことに遺憾です。これはロボットの権利を蔑ろにすることであり、また健闘をたたえあった二人に対する侮辱でもあります」

応樹はジムを飛び出すと、闇雲に走り回った。どこに向かおうとしているのか、自分では全くわからなかったが、気が付くと都市公園の中にいた。早朝のラジオ体操をしていた年寄りたちが、怪訝そうな顔で応樹を見つめている。応樹は、裸足で新聞を持ったまま走っていたのである。

応樹は立ち止まり、四方八方を見渡した。何も見付からないが、何を探しているのかもわからなかった。

「Clemency……」

戦友の名は、空の彼方へと消えていった。

「死ねーっ！」

司の叫びが響き渡った。抱えあげられた王者が、まさかさまにマットに叩き落される。司がカバーすると、レフェリーの手がマットを三回叩いた。

「やった！」

司は右手を高々と突き上げた。祝福の拍手が沸き起こっている。

ベルトを巻かれた後、リングを下りた司を、応樹は通路で待っていた。

「よくやった」

「うん。これもご指導のおかげです」

司は、左手を差し出した。応樹も、左手を出した。二人は、固い握手を交わした。

「ま、俺は何回も防衛したからな。まだまだスタートラインってところかな」

「そうですね。応樹さんを追い抜けるよう頑張ります」

応樹は、目を細めて笑った。未だに痛む頬を左手で押さえる間も、右手は小刻みに震え続けていた。

「今から行きましょうか」

「え、色々あるんじゃないのか」

「いいんです、チャンピオンは偉いから、わがまましていいって言っていました」

二人は会場を出ると、都市交通に乗り込んだ。途中何回か乗り換え、一時間ほど。更に三十分ほど歩き、小さなビルの事務所に到着した。

「よっ、Clemency」

電話の前にちょこんと座ったロボットに対し、応樹は右手を上げた。ロボットは、ゆっくりと首を回して、二人を確認した。

「ヒサシブリダナ、オウジュ」

「私もいるよー」

「アア、スマナイ、ツカサ」

司はバッグからチャンピオンベルトを取り出し、ロボットに見えるように掲げて見せた。

「今日ね、ベルト獲ったの。チャンピオンになったんだよ」

「ソレハスゴイ。ワタシニハソウゾウモデキナイコトダナア」

応樹は目を伏せ、司はその肩に手を置いた。

「デモツカサ、サイキンハロボットモツヨイカラネ。イツカニンゲントシアイヲシテ、カツナンテコトモアルカモネ」

「そうね。そういうこともあるかもね」

震える応樹の右手が、少しだけ握られていた。しかし応樹はそのことに気が付かないまま、心をも震わせ続けていた。